

平成 27 年 5 月

語り部：愛原 章

(事前に児童に配布したレジュメに沿って話を行う。)

私が小学校に入学したのが昭和 17 年だった。入学する前年の昭和 16 年 12 月に大東亜戦争が始まった。当時の学校は必ず大きな足洗い場があった。当時体操の時間は裸足で行っていた。通学は自分で作った草履を履いていた。12月8日の真珠湾攻撃によりアメリカと戦争が始まった。

父が呉の海軍工廠に勤めていたので、呉の小学校へ入学した。当時は小学校を国民学校と呼んでいた。卒業した時には小学校と言う呼び名に戻っていた。楽しみは父が映画館に連れて行ってくれたことだった。映画館に行くと、戦争のニュース映画が上映されていて、マンガ映画も見ていた。体操の時間は相撲や棒登りの競争をしていた。遊びは、とんぼ取りをしていた。当時網がなかったので、石に糸を巻きつけて投げ入れ、とんぼが飛んだところを捕まえていた。

食べ物は配給制度だった。人数によって切符をもらい、切符の量だけ材料をもらっていた。お米や麦、砂糖や日用品も配給制だった。今では想像もできないと思う。量は非常に少なかった。給食はあったが、大根の葉っぱが入ったお味噌汁一杯だけだった。お腹いっぱい食べる事はできなかった。体操で裸になると、みんなあばら骨が見えていた位痩せていた。

昭和 19 年 4 月に、父に召集令状が来た。村長より高知の部隊に入隊するよう電報が届いた。兵隊に行く人にお守りを持たせた。当時の呉には、軍港があったので、人口が多かった。呉では食糧事情が悪くなったので、家族は昭和 19 年 6 月に松山に疎開した。当時は伝染病も流行しており、私も栄養失調気味だった。小学校 3 年生 2 学期に桑原国民学校に転入した。百姓だったお婆さんの家に身を寄せさせてもらい、百姓の手伝いをしていた。

松山に来てすぐに、おじさんも海軍の兵隊として出征した。母とニワトリや牛の世話をした。病院も食べ物屋さんもなかった。百姓は自分たちでつくった米の一部を保有米として残すことができた。田んぼの広さによって政府に供出する量は決まっていたが、残りは農家が食べることができた。私も松山に帰って少しずつ元気になった。

戦闘機が落ちてきたこともあった。空中分解してバラバラになった戦闘機を見に行くと、大きな穴が開いていた。アメリカの飛行機が落ちたと思った大人たちは、竹やりをもって戦闘機に近づいていた。

昭和 20 年 7 月 26 日の夜には松山が空襲にあった。夜中に起こされて防空壕の中に逃げ込んだ。B29により焼夷弾を落とされた。県内では、宇和島や今

治は爆弾を落とされた。上空約3,000メートルから焼夷弾の束を落とされた。焼夷弾は燃えながら落ちてきた。私は防空壕の中から空襲の様子を見ていた。B29はサイパンから飛んで来た。城山を中心に時計回りに旋回しながら松山の町を焼いて行った。日本各地で空襲にあい、多くの方が犠牲になった。今治では500人以上の方が亡くなった。松山でも250名以上亡くなったと言われているが、530人くらいの方が亡くなったのではないかと言われている。松山は灰になってしまった。焼夷弾は何十本かの束になって落とされ、落ちる時にバラバラになって散らばって、たくさんの火の子が落ちてくるようだった。いろんな種類の焼夷弾が落とされた。焼けた後に行ってみると、家に5、6本は刺さっていた。焼夷弾に直接当たって亡くなった方もいた。焼夷弾が落ちてくると火災を消すように国から言われており、防火用水として玄関に水が入ったバケツが置かれていた。火を消そうとしていたが、火災の威力が止まらず、そのまま火に飲まれた人もいた。

その後12月頃まで、疎開していた家では私達と3家族と一緒に生活した。歯ブラシもみんなで使いあった。

空襲で亡くなったのは50万人とも80万人とも言われている。しかし、実際は戦災で亡くなった人は300万人を超える。

皆さんは、戦争のない、とてもいい時代に生まれてきた。戦争の時代は本当に悲惨だった。戦争の事を忘れない、これが戦争を二度としないということに繋がっていく。復興するにもとても時間がかかった。ボンネットバスが走るようになるまで9年程、タクシーが走るようになるまで14年程かかった。

(原子爆弾が落とされた後の広島の写真を見ながら)

松山の空襲の時は、全部焼かれてしまったが、広島の前爆の投下の時は、たった1発の爆弾で約10万人の方が亡くなり、街にあった何もかもがなくなった。写真ではあるが、全て事実で本当に起こったことだ。戦争をせずに外国と付き合い合っていけるようにしてほしい。

昭和の戦争で犠牲になった人は、国の内外で300万人を超えると考えられる。この方達を忘れないことが、平和を守ることになると思う。皆さんには、これから昭和の歴史を勉強して、戦争が故に亡くなられた大勢の人達を、心から悼む気持ちを育ててほしい。そうすれば日本が再び悲惨な戦争を繰り返すことは無い。

質疑応答（約 10 分）

Q：松山からはきのこ雲はみえたか？

A：見えた。いつもにない黒い雲が見えた。テレビの無い時代だったので、新型爆弾が落ちたと聞いた。あれはピカドン、原子爆弾だということを知ったのはずっと後のことだった。

Q：松山に病院はあった？

A：久米には2件の病院があった。内科の病院だった。お腹が痛くなると梅干しのエキスを口の中に塗られていた。熱を出すと、水で濡らした手拭いで冷やすだけだった。氷もなかった。フラフラになると毒蛇を捕まえた焼酎を気付け薬として飲まされていた。

Q：日本が戦争をしている頃の遊びは？

A：チャンバラごっこや縄跳び、高跳びだった。かくれんぼやコマ回し、ラムネ玉をはじいて遊んできた。

Q：原爆が落ちたときの匂いや音は、松山からわかった？

A：煙だけ見えた。

とにかく、今とは全く違う生活だった。音楽の授業も「ドレミファソラシド」ではなく「いろはにほへと」だった。今みたいに習い事もなかった。そろばんと習字くらいだった。英語は禁止されていた。